



251号
2020/3

日中文化交流市民サークルわんりい
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp 2018/7/1



ラーヤンビン
拉洋片 (中国の覗きからくり) : 夢中に箱の小窓をのぞき込む子供と一人芝居をやるお爺さん、箱には「拉洋片」と書いてあります。見たことのない娯楽ですが、調べてみたら、「拉洋片」とは箱の中に絵あり、ライトあり、仕掛けもあってドラマがいっぱい詰まっているそうです。ぜひ一度見てみたいです。

(2018 年 2 月遼寧省瀋陽にて 日中水墨協会会長=満柏 撮影)

‘わんりい’ 2020 年 3 月号の目次は 20 ページにあります

宠辱不惊 (寵辱不驚)

中国で見つけた“有名小学校入学準備の為の”絵本から 文と訳・有為楠 君代

日本語では、「^{ちようじよく}寵辱にも驚かず」と言いますが、個人的には使用例を見たことがありません。

・ > ・ > ・ > ・ > ・ > ・

昔、^{ろしやうけい}魯承慶という清廉潔白な大臣がいました。ある時、食糧運搬船担当の官吏が、運搬船の沈没を防ぐことが出来ませんでした。魯承慶は、この担当官吏の業務評価を中の下としましたが、この官吏は、船の沈没の理由を説明もせず、評価を甘んじて受けました。

その後、魯承慶が調査してみると、あの時、船が転覆したのは、急に大風が吹いた為だと分かりました。魯承慶はすぐにこの官吏の成績を中の上に変更しましたが、彼は特別の反応を示しませんでした。それを見て、魯承慶は「この男は、他人の評判を気にしない人間だ、将来きっと立派な役人になるだろう」と考えました。そして、彼を重要な仕事に抜擢したのでした。

・ > ・ > ・ > ・ > ・ > ・

言葉の意味：寵→可愛がる、名声を得る；辱→恥辱を受ける；褒められてもけなされても気にしない、自分の得失に動じない人を形容する。

使い方：功名心の誘惑に直面しても、「寵辱にも驚かず」で、心を動かすことはない。

・ > ・ > ・ > ・ > ・ > ・

このお話、子供向けですから「昔」となっていますが、ここに登場する魯承慶という政治家は、唐代の人で、彼自身もこの官吏と同様に立派で、心の正しい人だったようです。彼は一時期、役人の評価をする役目についていて、役人の仕事振り

を査定する時も、成果の背後まで目を配り、公平に査定することを心掛けたと伝えられています。

そして、このお話は、明代の著作者^{こうじせい}洪自誠と言う人が書いた、「^{さいこんたん}菜根譚」という本に出て来ます。「菜根」とは野菜の根っこ。珍しい書名ですが、植物の根は噛むのに苦勞するが、噛みしめることが

出来れば、諸事万端真の意味が味わえる」と云った古来の言葉を引いたもので、三教（仏教・儒教・道教）の教えを踏まえて処世術を述べたものです。

因みに、この書名、^{しゅき}朱熹が撰した「小学」の中にある、「人は常に菜根を噛み得れば、則ち百事なすべし」という言葉からとられています。

洪自誠は明朝末期の人で、若くして科挙に合格し、有能な政治家となりましたが、王

朝末期特有の乱れた世の中に生きづらさを感じ、野に下って著作を楽しみました。

前集 222 条、後集 135 条からなるこの本は、前集で他人との交わりの奥義を説き、後集では自然を愛でる閑居の楽しみを記しています。早くから、中国よりも日本で好まれ、禅宗では、禅僧たちが経典の次にたいせつなものとして愛読しているそうです。

聴くところによると、昔の政治家や実業家の中にはこの本の愛読者が多かったそうです。今でもそうかもしれませんね。私自身、若い時に読んだ時は、通り一遍な感想を持っただけでしたが、今項目を拾ってみているだけで、無性に読みたくなっています。歳をとってから読んでこそ理解が深まる本なのかもしれません。



挿絵 満柏氏

これまで 5 回に亘って遼陽を紹介してきました。最終回となる今回はその集大成とし、筆の向くまま書いて行こうと思います。

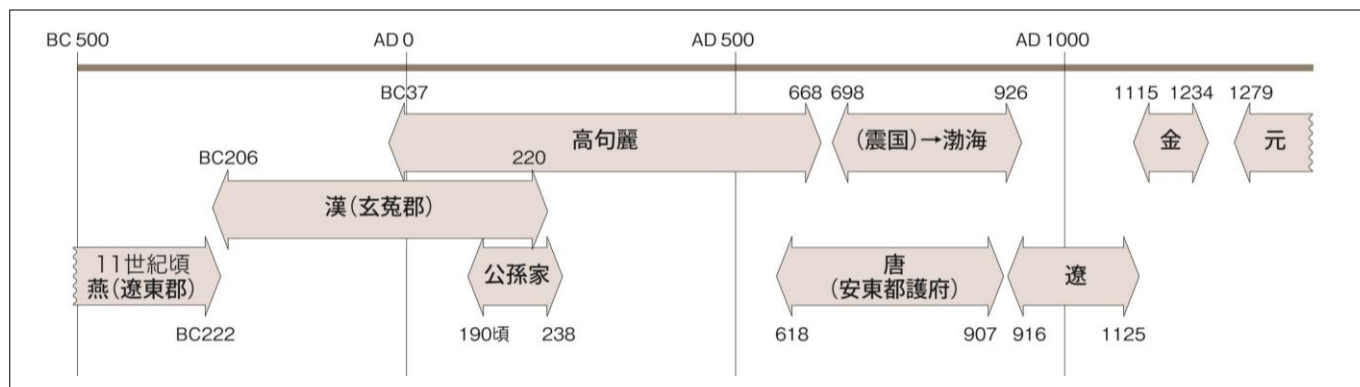
戦前大連に住んでいた今年 90 歳になった（と言われた）ある女性の遼陽に関する思い出から書き始めます。Y さんと言われる女性は、戦前大連に住んでいて戦後引き上げた人たちのグループで「老虎会」通称、大連会の方です。引き上げた時は 18 歳で、旧満鉄本社のすぐ近くにあった「弥生高等女学校」の生徒でした。私も大連で 2 年間仕事をしていたので特別にそのお仲間に入れさせてもらっています。会合は、3 か月に 1 回開かれますがその度にわんりいの会報を持参しています。9 月号（2019 年）をお見せしたところ「遼陽」の連載が始まった月で Y さんが興味を持たれたのです。お父様は若いころから満鉄に勤められ、Y さんは大連で生まれました。一家は大連でずっと生活を続けるつもりでしたが、敗戦のためお父様が一生懸命働いて建てた家も失い着の身着のままで日本に帰ってこられました。Y さんは高齢にも拘わらず歌はお上手だし、「江戸かっぽれ」にはまり込み踊り回っている一方、中国語も勉強されていると言うスーパーおばあちゃん（失礼）です。その中国語の先生は、遼陽のご出身で両親は遼陽の名士だそうです。したがって「遼陽」という文字を見た時、頭にスイッチが入ったようでした。時々葉書をいただきますが、遼陽のことがよく書かれています。ご本人は遼陽に行ったことはないそうですが、ある葉書には「遼陽と言うと、♪遼陽城頭夜は闌けて～～♪ で始まる軍歌をすぐ思い出しますが流石に中国語の楊先生には話せません」とありました。（後日この軍歌を M 先輩にお聞きすると、「橋中佐」という軍歌と分かりました）また「私どもの年代には、遼子さんという名前がありました。遼東半島生まれと言うことでしょうか？」など。遼寧省の「遼」、遼陽市の「遼」、遼東半島の「遼」など遼の文字を見れば懐かしい思い出が次々と浮かぶようです。



Y さんが 2 歳の時の家族写真（左上の壁に白塔の絵が掛かっている）

10 月に来た葉書には、「大連の家の居間に「遼陽白塔」の絵が掛かっていた記憶がありますが、戦後の混乱期にその絵がどうなったのか今になって悔やまれます。でもあの絵のお陰で遼陽という街はかなり幼いころから記憶していました。」とありました。それから二週間くらい経った頃でしょうか、Y さんから封書が届きました。何だろうかと思いつきながら開封して見ると、手紙と共にキャビネ版の写真が入っていました。それは白塔が描かれた絵をバックに家族水入らずの写真でした。家を整理したら偶然見つかったそうでそれをコピーしたものです。写真には 3 か所付箋で簡単な説明がされていました。ご本人が 2 歳の時で、付箋には〈当時 2 歳、現在 90 歳〉と書かれていました。昭和 6 年秋の写真です。烏兔忽忽たる感じがしますね。

次にこの 1 月号で遼陽出身の人物の紹介の最後に「秋吉敏子」さんについて書きました。1 月号の原稿は昨年 10 月に書き上げましたが、ちょうどその頃読売新聞に新潮新書の「秋吉敏子と渡辺貞夫」と題する本の広告があり、それに目が留まりました。早速購入し一読しました。経歴は 1 月号の通りでしたが一つ注目した文章がありました。ご本人は 26 歳で渡米した後米国人と 2 度結婚して



中国東北地方の勢力の変遷（遼陽を中心として）

いるのですが、ずっと米国に住み続けています。従って私は生まれ故郷の遼陽や敗戦で引き揚げ大分や東京に住んだりしている彼女の 26 歳までの記憶が、ジャズピアニストの魂にどのように影響を及ぼしているのか、いないのか知りたかったです。本の内容は、米国での修業時代、渡辺貞夫との交流、米国各地での公演、数々の受賞と殆ど米国での活躍ぶりが描かれています。注目した文章は次の部分です。彼女は 1960 年に「ロング・イエロー・ロード」という郷愁に彩られた代表作を作曲したのです。彼女は、「故郷・満州の土けむりの道の思い出と、黄色人種の私が遠く険しいジャズの道を歩む決意を重ねて作曲しました。やがて〈これを聴かないと秋吉のコンサートに行った気がしない〉と言われるようになり、自分のジャズ公演では必ず演奏しています。演奏するたびに〈今も長く黄色い道を歩んでいるんだ〉と初心に引き戻してくれます」と言っています。『イエロー』は、満州の当時の土けむりの道、満州の夕陽に染められた大地をイメージすると共に、やはり白人社会における当時の黄色人種への偏見に打ち勝つ決意を示しているのです。日本のジャズの歴史は秋吉敏子がいてこそその隆盛なのです。

さて現在の遼陽市はどのような街でしょうか？アルミの生産が盛んで、石油化学や化学繊維などのウエイトも大きいようです。新興の工業都市ではありますが、やはりこの地方は遼寧省の省都である瀋陽市が中心で、取り囲むように位置する鞍山市、撫順市、遼陽市、本溪市、鉄岭市などの衛星都市は、どうしても補完的な役割を求められる

ようです。だからでしょうか！これらの都市はイメージがもう一つはつきりしませんね。従って衛星都市に埋没することなく、自らの存在感をアピールし、観光客をたくさん呼び込むことが必要でしょう。遼陽市は、美しい白塔を持つ都市ですから日本の奈良市のように美しい五重の塔を持つ都市と姉妹都市となって文化交流するのもいいかと思えます。さらに紀元前から東北地方の中心であったというプライドをどのように具現化するかは重要ではないでしょうか。たとえば丹東市の駅前の巨大な毛沢東像のように遼陽駅前に巨大な「曹雪芹」の銅像でも建てたらいかがでしょうか？

特産品ですが、食べ物は「梨」が有名で美味しいそうです。また中国語では「榛子」と書きますが、ヘーゼルナッツの生産地として有名です。お茶やお酒のおつまみにいいですね。「塔糖」という小さな円錐形の甘い飴のようなお菓子も地元ではよく知られているそうです。甘党の筆者は是非一度口に入れてみたいです。「湯河魚」と言う川魚も美味だそうで鰓掛けにした料理が一般的だそうです。一度食べに行きたいですね。

このシリーズの最後に、東北地方の歴史を図示しました。これまでの 5 回の中でも遼陽を中心とした歴史をちりばめて書いて来ましたが、まとめると上記の流れになります。いろいろな民族の興亡のあった地域であることが分かります。漢民族が支配した時代は少ないことがお分かりいただけると思います。 (完)

李商隱の『夜雨北に寄す』と杜甫の『江南にて李龜年に逢う』

報告：花岡風子

今 2019 年最後の漢詩の会では、李商隱の『夜雨北に寄す』と杜甫の『江南にて李龜年に逢う』を鑑賞しました。

一首目の作者李商隱は、現代の日本人には知らない人も多いかと思いますが、杜牧と並んで晩唐を代表する詩人の一人です。とても個性的な詩人なので、李白になぞらえて「小李」と呼ばれることもあります。812 年（813 年説もあり）に生まれ、858 年に 47 歳で亡くなっています。

良い家柄に生まれましたが、10 歳くらいの時に父親が他界します。優秀ゆえに援助してくれる有力者はいたものの、激しい権力闘争に巻き込まれ、役人としては不遇な人生を送りました。しかし時代を代表する詩人でもあり、妖艶で美しい詩風は後世の詩人に多大な影響を与えました。「内容的にはやや朦朧としたところがあり、なんだか現代の歌謡曲やフォークソングにもありそうな新しい雰囲気があるんですよね。」と植田先生。

唐王朝末期の権力者たちの抗争に巻き込まれたとは、非常に不遇な感じもしますが、そんな殺伐とした境遇に置かれながらも、艶のある優美な詩を書いた李商隱という人物にムクムクと興味が湧きました。

李商隱は 851 年の 7 月に巴蜀（今の四川省東部）に派遣されています。この詩は寂しい派遣先での生活を詠んだ作品なのだそうです。

yè yǔ guī jì běi
夜 雨 归 寄 北

jūn	wèn	guī	qī	wèi	yǒu	qī
君	問	归	期	未	有	期
bā	shān	yè	yǔ	zhǎng	qiū	chí
巴	山	夜	雨	漲	秋	池
hé	dāng	gòng	jiǎn	xī	chuāng	zhú
何	当	共	剪	西	窗	烛
què	huà	bā	shān	yè	yǔ	shí
却	话	巴	山	夜	雨	時

yā u
夜雨北に寄す

き き いま き
君帰期を問うも未だ期有らず

hā sān shí yǔ qiū chí mǐn zǎng
巴山の夜雨 秋池に漲る

í tǐng mǎ sāng sāi zōu shí yù kǐ
何か当に共に西窓の 燭を剪り

kuāi hā sān yè yǔ shí wǔ huà
却って巴山夜雨の時を語るべき

意味をみてみましょう。

▲一句目は、君は私にいつ帰るかと聞くが、まだ帰れる時期がわからない。

▲二句目は、辺鄙な四川の山間に激しい夜雨が降りそそぎ、秋の池には水が満々と漲っている様子。

▲三、四句目は、西向きの居間のランプの燃えかすを切りつつ（夜更かしをしながら）、雨の降る巴山の夜は寂しかったよ、と一緒に語り合える時がいつ来るのだろうか。

「いつか君と一緒に夜更かししながら、今のこの寂しさを語り合いたいな」などと言うのは確かに現代風な感じがしますね。こんなメールを受けると、たいいていの女性ならグッとくるのではないのでしょうか。

表題の「寄北」とは、詩を書いて北の方の人に送ることです。当時、李商隱は現在の四川省東部の巴蜀の地におり、妻も親友もこれより北方の長安にいたので、「北に寄す」と題したわけですね。「内に寄す」となっているテキストもあります。「内」とは妻のことです。

ここで問題となるのは一句目の「君」が誰なのか、ということです。「李商隱は 851 年の 7 月に四川省東部、巴蜀の地に赴任したのですが、この頃奥さんも亡くなっています。奥さんが亡くなって何か月も経ってから、訃報を知ったらしいのですが、奥さんの死を知らずに書いたとしたらちょっと悲劇的で、切ないですね。また、『君』が奥さんではなく親友のことだと言う説もあります。男性同士がまるで恋人同士のように互いに友情を誓いあう風習は、中国文学の世界ではさほど珍しいことではありません。あるいはもしかして、相手は奥さんとは別の存在（愛人？）かもしれないとの見方もあるようです」と植田先生。だとすれば奥さんの生存中に、すでに別の人がいたことになりそうです。本当のところはどうか

わかりませんが……。こういうファジーなところが李商隱の詩の特徴でもあるそうです。

三句目の「西窗」というのは、西向きの居間の窓を指し、ホームライクなイメージを醸し出すキーワードで、「燭を剪る」とは、油を燃やすランプの芯の燃えかすを切ることをいいます。つまりランプの灯を掻き立てながら夜更かしすることです。明代の小説集に『剪灯新話』というのがあり、江戸時代に日本でも大流行しましたが、これは、読んでいるうちについて夜更かししてしまうほど面白く新奇な話、という意味です。また「剪西窗烛」「西窗话语」は、再会を切望する気持ちを表す四字熟語として、後世では夫婦間に限らず友人同士の間でも使われました。

原文を見ますと、一句目に「期」という字が二回も出てきます。近体詩（律詩・絶句）の場合、字数が限られているので、一般的に同一字の重出は避けるのですが、リズムを取るために敢えて入れる場合もあります。この詩はその修辞効果を狙ったもので、平仄も合っています。二句目と四句目にも「巴山夜雨」が繰り返されています。この繰り返しも普通はくどい感じがするのですが、この詩ではとてもリズムカルで、また何かを切々と訴えるような感じがします。しかも同じ文句を繰り返しながらも平仄はしっかり合わせています。こういったところにも作者独特の、非凡な才を感じさせます。

李商隱の字は義山、号は玉谿生、または獺祭魚。自ら獺祭詩人と称したそうです。川獺は取ってきた魚を川岸に並べる習性があり、それを人々が獺祭（カワウソの祭壇）と形容したことから、転じて、多くの書物から典故を探し出し、自作の詩文を飾り立てる癖のある人のことを言うようになったそうです。今回取り上げた作品には典故が使われていませんが、李商隱の作品には手の込んだ典故が多く、これまで読者を悩ませてきたということです。

ところで「獺祭」と言えば、日本人にとっては山口県の高級日本酒を思い浮かべる方が多いと思いますが、私は、広げた書物があちこちに重なる書斎の片隅に「獺祭」の瓶とグラス、暖炉の火やランプの火のある光景をうっとり空想してしまいました。「獺祭」を飲みながら、獺祭魚よろしく好きな書物を思

い切り広げられる書斎があればなあ……。なんて、毎度子供の寝静まった自宅のリビングやドトールコーヒー店で原稿を書くアラフォー女子は、思わず夢のような空想をしてしまいました。

さて、中学生の男子の母でもある私ですが、最近男の子の方が寂しがり屋かな？と思うこともあります。国を背負う官僚であれ、兵士であれ、みんな幼少の時代があったはず。一人になったら寂しいにきまっているのです。無理に虚勢を張るのではなく、素直に「俺はこんな風に寂しいよ」って言葉で伝えられる男性。素敵だなあ、と思いました。日本人男性にはハードルが高いかもしれませんが……。男性に素直な気持ちを告白されたら、女性の心も傾きますよね(^^)

一方で、メールや LINE はおろか、手紙すらともに届かない時代だからこそ、ここに書かれた「君」は誰なのか？という想像も膨らむわけです。今の世の中みたいに、個人情報さえ白日の元にさらされ、この「君」が特定されていたら、詩の味わいも損なわれてしまうような気がするのは、私だけでしょうか。

二首目のお題は杜甫の『江南にて李龜年に逢う』という詩です。杜甫最晩年の 770 年、正に亡くなる直前の作といわれています。

安祿山の乱の十数年後、家族と共に江南を流浪していた杜甫が、往年の人気歌手であった李龜年に偶然出逢った時のことを詠んだ詩です。杜甫が 14 歳で社交界にデビューした頃、唐王朝はまさに絶頂期を迎えていました。そして李龜年は既に有名な歌手として一世を風靡していました。その李龜年との思いがけない再会は、「恐らく杜甫にとって人生最後の感動だったと思います」と植田先生。

jiāng nán féng lǐ guī nián
江 南 逢 李 龟 年

qí	wáng	zhái	lǐ	xún	cháng	jiàn
岐	王	宅	里	寻	常	见
cuī	jiǔ	táng	qián	jǐ	dù	wén
崔	九	堂	前	几	度	闻
zhèng	shì	jiāng	nán	hǎo	fēng	jǐng
正	是	江	南	好	风	景
luò	huā	shí	jié	yòu	féng	jūn
落	花	时	节	又	逢	君

江南にて李龜年に逢う

岐王の宅裏、尋常に見る。

崔九の堂前幾度か聞く

正に是れ江南の好風景

落花の時節又た君に逢う

意味を見てみましょう。

- ▲一句目、岐王の邸宅でよく会いましたね。
- ▲二句目、(貴族の)崔九の屋敷の前でも、貴方が歌うのを何度か聞きました。
- ▲三句目、四句目は、正に江南の風光明媚な景色の中で花が落ちる季節に、思いがけなくまた貴方と再会出来たのですね。

岐とは地名で、岐王とは岐の国の王族ということです。ここでは玄宗皇帝の弟李範を指します。李範の邸宅は洛陽にありました。十四歳の杜甫はここで初めて当時の大スター李龜年と顔を合わせたのです。それも一度だけではありません。「尋常」とは頻繁にという意味です。崔九とは玄宗の寵臣であった崔湊のこと。「九」とは兄弟の序列が九番目の男子、日本語でいうと九郎さんということです。このような兄弟の序列を排行といいます。父方の従兄弟は実の兄弟並みに扱ったので、九番目といっても別に子沢山ということではありません。「堂」とは屋敷のことです。この屋敷の前でも少年杜甫は李龜年の名調子に何度も聞き惚れていました。

しかし唐王朝の華やかなりし頃にこそ人気歌手として鳴らしていた李龜年も、天才少年詩人として十四歳から社交界デビューしていた杜甫も、そして、贅沢を縦にしていた貴族達も、安祿山の乱を機に、王朝と共に没落していったのです。

長安の都の荒れ果てたさまに「国破れて山河あり」「白頭搔けば更に短く、渾て簪に勝えざらんと欲す」と嘆いた後、杜甫は様々な曲折を経ながら、苦難に満ちた流浪の旅を続けました。湖南の地に辿りついた頃は、すでに亡くなる直前でした。身体もすっかり衰えていたのでしょう。

さて、この詩は中国では教科書に載っているほど、よく知られた詩なのだそうですが、植田先生はお若い頃、なぜこの詩が杜甫の傑作のうちに入るのか、

今一つ理解できなかったそうです。その後、杜甫の人生を知っていくことによって、唐の栄枯盛衰と杜甫の人生が重なり合い、深い味わいを感じられるようになったそうです。「若い頃は岐王や崔九がどんな人かも分からないし、李龜年との関係も何だかピンとこない。なんでこれが杜甫の傑作のうちにはいるのかな、なんて思っていました。ところがこの詩を書いた後、杜甫は死んでいくのですよ。自分の人生と唐王朝の盛衰が見事に一致しています。そして、ここにきて突如現れた李龜年の人生も……。『落花の時節また君に逢う』とは、まさにそのことを言っています。詩人の経歴を調べるうちにその素晴らしさがジワジワと身に染みる、そんな詩ですかね。」と植田先生。

都を遠く離れた江南の地(現在の江浙地方ではなく、ここでは湖南省を指す)で李龜年に再会することで、杜甫の記憶の中にある華やかな幼少時代の思い出深いシーンが、次々と脳裏に浮かんできたのでしょう。そしてまた、風光明媚な湖南の地で、よりによって花が落ちる時期に、かつて良き時代を共有した人と思いがけなく再会したのです。人生の最終章として、杜甫はこの再会をどう受け止めたのでしょうか。杜甫と李龜年の個人的関係がどうであったかは、もはや問題ではありません。感動の裏にこみ上げてくる様々な想いは如何ほどだったのでしょうか。

戦争を知らないアラフォー女子にとっては、焼け野原となった街角に茫然と立ちすくんだり、雑草や木の皮まで食べて流浪の旅をするなど、ただ想像することしか出来ませんが、杜甫の人生を辿ると、読むだけでも、ぐったりとなるような疲労感を覚えます。58歳で亡くなるとは、今の時代では若すぎますが、杜甫という人は、もう十二分に時代と共に生き終わったのだと思わずにいられません。そして、不思議であり素晴らしいことだと思うのは、杜甫という人の肉体がこの世から消えて1200年以上経つのに、杜甫の残した詩を読むと、あたかもまだ私達の近くに生きているかのような錯覚を覚えることです。

今回も植田先生の誘導で「漢詩」を通して杜甫の息遣いが聞こえる時代にタイムスリップしたようなひと時でした。

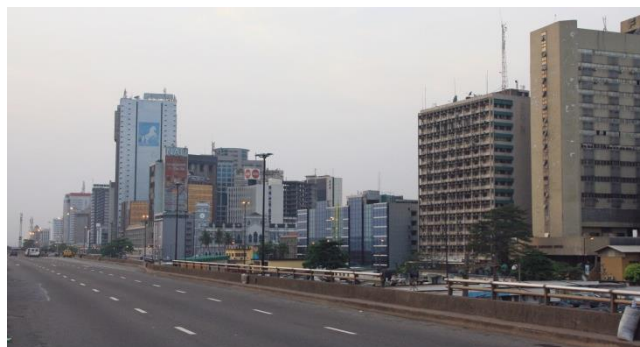
海外出張の思い出（ナイジェリア編⑨）

高島敬明

前は、S 班長が「踵骨骨折」という大けがをして病院に担ぎ込んだものの、一晩病室で過ごしましたが医者と相談することなく私の経験から兎に角日本に早く帰国させるしかないと判断し、朝迎えに来たエマニエル君の車に乗せてキャンプに戻ったところまででした。

キャンプの H さんから S マネに事故の概要を報告してもらいました。足のカカトの踵骨骨折で全治 1 か月であり、歩行は出来ないこと等を報告してもらいました。S マネは「S 班長はこの 1 年近くよくやってくれた。1 か月くらい何もしないで体を治してから帰国してください」との話でした。そんな安易な考えなんだ、と私は不安になり私から、①踵骨骨折は完治するまで時間がかかること、②歩けるようになっていびつに骨がくつき易いため、満足に歩けなくなること、③こちらの十分でない医療で満足に歩けなくなった場合、当社の組合の絡んだ責任問題になること、等を繰り返して説明しました。やっと S マネージャーは理解をしてくれたようで、社員が何人か帰るときに付き添って帰すようにします、とのことでした。彼の帰国には皆で空港まで送りましたが班長は悪い悪いと呻くように言いながら空港の中に消えて行きました。結局彼は、半年間日本で治療を受けましたが、まともに歩くようにはなりませんでしたが、組合問題にはなりませんでしたが、歩くとき踵を地面に着くたびに痛みを感じるのだそうで、一生体を横に振りながら歩行をするのです。つらい人生になってしまいました。

1979 年に始まった「第 2 次オイルショック」が 1980 年（昭和 55 年）に入ってアフリカの産油



ラゴスの街並み（2015 年）ウィキペディアから

国ナイジェリアにも押し寄せて来ました。まず最初にジーゼル（軽油）が品薄になって来ました。ガソリンもそうですがジーゼルは我々活動の拠点であるキャンプの全ての生活を支えているのです。250 馬力のジーゼルエンジン 2 台が交互に昼夜を問わず働き続けていて、これが停まると完全に我々の生活は出来なくなって来るのです。まずコンテナハウスに設置された冷房設備、我々の毎日の食事を支えている大きな冷凍庫、セキュリティ設備、上水道の水処理設備、下水道の処理などすべての生活に関係した電気の供給が停まるわけです。冷凍庫には 3 か月分の食材が眠っていますが、当然ダメになるでしょうし、冷房設備でも 2 ～3 日は辛抱できますが毎日となれば話は違ってきます。兎に角ジーゼル油を確保するしかないのです。

我々は毎日、毎日大使館に通って情報を収集しジーゼルの入手に努めて行かなくてはならなくなりました。あてもなく石油スタンドを回ったり、日本の商社や各企業をわけもなく歩くわけですが事情はどこも同じです。そうこうするうちに今度はプロパンガスが無くなって来ました。これも大変な問題です。魚国のコック T さんはプロパンガ

スで毎日料理を作っているのです。これも毎日商社を頼って紹介を受けて工場やトラックターミナルのような所をまわり、少ない量でも買って帰りました。ターミナルではシュシュとボンベにガスを詰めて行きます。詰め終わるとエマニエルとともに奪い合うようにボンベを確保します。

その詰め込み場所の吹きさらしの休憩所では、作業員が鼻歌を歌いながら煙草を吸って談笑しているのです。危険物を扱っているのにこれでは命がいくつあっても足りません。毎日本業そっちのけでジーゼルとプロパン確保のために奮闘しました。企業がこんなわけですから一般の家庭はもっと大変のようでした。S マネージャーの家も大変のようでした。

燃料確保が厳しくなるにつれて、我々に麻雀を教えてもらうんだと奥さんと中学生くらいの娘さん 2 人がキャンプに来るようになりました。麻雀と言っていますが魚国のコック T さんの作る夕食が目的なのです。それに子供さんはいいのですが、奥さんの派手で刺激的な服装にはいくら真夏の国と言ってもキャンプの男たちは日本にいる家族から半年も一年も離れて暮らす者ばかりです。こんな男たちの前に出る服装ではありません。H マネも私もほとんど困り果てて、どうしたものかと思案の真っ最中に事件は起こりました。魚国の T さんが「私はキャンプの皆さんの食事を作るためにアフリカまで来たのです。マネージャーの家族の為のコックではありません」と筋の通った文句を言いだしました。最初のうちはよかったのですが、とうとう夕食時になってもコンテナハウスから出てこなくなりました。H マネは、「高島さん、あなたが一番付き合いがあるのだから行って話してください」と言うのです。隣では奥さんが麻雀をしているので仕方なく裏から回ってノックしますが返事がありません。作業員の食事もあるし困り果てました。冷凍庫や冷蔵庫にはインスタントラー

メンがたくさんあるのは知っていました。今日は皆にラーメンで我慢してもらおうと冷蔵庫に入ろうとした時、H マネが飛んできました。「それはまずいよ。ここはコックさんの領域だから我々が入るとなお話がこじれてしまうよ」とのことでした。奥さんには「コックが体調不良で・・・」と説明し何とか引き上げてもらいました。すると笑顔で T さんが出て参りました。遅い夕食に T さんは小エビのいっぱい入った特上のチャーハンを作ってくれました。流石に H キャンプマネも決心して S マネに事情を話しました。短パンの刺激的な姿が見られなくなるのは残念でしたがこれで一件落着です。

ジーゼルの問題があってから協力会社の運送屋にもよく行くようになりました。そこに雇われのドイツ人メカニシャンがいてすぐに仲良くなりました。もっとも言葉は通じないのですがジーゼルについても彼からよく片言の英語でアドバイスをいただきました。人の良い彼はいつもニコニコ顔で話しかけます。「タカチマ、お前は何故アフリカで結婚しないのか?」「いや日本には妻子が待っているんだ」と言ってもしつこく食い下がります。挙句には「タカチマ、固形のカレーのルーを分けてくれないか」ときます。「カレーのスープは最高なんだ」「OK。コックに相談するよ」と話して別れました。彼にはあれこれ世話になっていることもあり、T さんにお問い合わせすると、「又ですか」とのことです。私以外にも誰かに話しているようでした。T さんは、仕方がないかとカレールー 3 個を冷蔵庫から持ってきてくれたので、それを持って運送屋の構内の住宅まで届けに行きました。中から彼がニコニコしながら出て来ました。さらに後ろから例のミミズのように髪を編んだ頭の子供たちが 3 人出て来ました。明らかに彼の子供です。結婚を勧めるはずです。ドイツ人、いや白人は生命力が旺盛と思いました。(つづく)

中国山西省の旅——各地のキリスト教会を訪ねて（後）

為我井 輝忠

今回の旅行は8月22日から9月5日までの10日間の旅行であったが、すべてガイドの黄さんにアレンジしていただいた。早速、到着してから翌日には各地の教会を訪ね始めた。

まずは太原市内の教会を訪ね、次いで北に向かって忻州、原平、代県、朔州を移動しながら各地の天主教（カトリック教会）と基督教（プロテスタント教会）教会を求めて、移動した。

最初に太原市にある教会から訪ねた。太原市は山西省の省都であるので大きな教会はいくつもある。黄さんの案内でまず訪ねたのは「太原

天主堂」である。ここはかなり古いカトリック教会で、規模の大きさだけでなくその美しさにも驚かされた。1870年に創建されたのもう150年の歴史がある。北京にある宣武門天主堂（1605年設立）や王府井天主堂（16053年）に比べると、かなり新しいが、それでも中国のカトリック教会としては古い方に属する。

大原市内では他に「太原教区主教座堂」、「沙溝天主教堂」、「太原基督教会」を訪ねたが、最後の教会はプロテスタントの教会である。どの教会も詳しい情報はほとんどなく、名称

と写真だけにとどめざるをえなかった。太原市内には10以上の教会があるようであるが、大部分はカトリック教会で、プロテスタントの教会は少ない。歴史的にみて、カトリック

教会の方が早く中国に進出してきたので、この派の方が圧倒的に多いのだろう。しかし、どちらにしても日曜日となると、多くの人々がやって来て会堂の中には入り切れないほどである。こんなにもたくさんの人々が押し寄せるのには驚いた。何か理由があるのかもしれない。

太原から原平市へ移動した。ここでは「南青推天主堂」

を訪ねた。この教会はかなり古そうである。さらに小さな教会をいくつかみてまわった。次に代県へ行き、「板寺山経母堂」を訪ねたが、ここは大変大きな教会で巡礼地となってい



華麗なる「太原天主教堂」



「太原基督教会」（プロテスタント教会）



讚美歌集

て、聖母マリアを祀る教会のようである。教会の入り口で車を降りて、山道を 1 時間位登った。途中 20 カ所位数百メートル毎に小さな祠のようなものが道の両側にあり、そこにはイエス・キリストが磔になる道中を表す印があり信者たちがグループごとに各箇所を祈りをささげ、教会に向かって行く姿が見られた。老若男女あらゆる人がいた。こんな風景を見ていると、ここが中国とはとても思えなかった。まるでヨーロッパの巡礼地を歩いているようであった。

教会に着くと、中も外も信者で溢れていた。ちょうど結婚式が行われていて、華やかな雰囲気が見られ、西洋風な衣装を身にまとった花婿と花嫁が神妙な顔で牧師の話に耳を傾けていた。

最後に、大変珍しい教会を紹介したいと思



「大保溝經母堂」と結婚式の様子



太原板寺山聖母堂

う。それは同じく代県にある「大保溝經母堂」という中国寺院風の教会で、外側は中国風、内部が西洋式という特異なカトリック教会である。このような教会は雲南省にあるのを本で見たことがあり、恐らく他にはないものと思われる。

各地で仏教寺院もいくつか訪ねたが、古刹が多く、どこも興味深いものがあつた。私が訪ねたのは、太原市の「双塔寺」、「晉祠」、代県市の「阿育王塔」、豆村鎮の「佛光寺」、大同市の「懸空寺」等である。

本来ならば、もっと多くの教会を紹介したいが、何分詳しい情報が得られないので、今回は特徴のある教会だけにとどめた。次回を期したいと思う。

1974 当時のアラスカ州のアンカレッジは未だ北極海で発見された原油の輸送パイプラインの工事は始まっていなく田舎町でした。冬の天候は年に1、2回零下40度位になることもありますが、普段は零下17度位で零下25度を下回ると学校はお休みになります。アンカレッジは北緯61度に位置し北極圏に近く、真冬に明るくなるのは8時半から9時くらいで午後2時半にはもう暗くなり始めました。太陽は地平線のすぐ上を滑るように東西に移動します。夏は逆に夜の11時くらいまで明るく真っ暗にはならず朝3時にはもう明るくなります。こんな中の楽しみと言えば冬はスキー、夏はキャンプと鮭釣りくらいでした。夏の気温は日によりばらつきはありますが日中は20度くらいで快適でした。アラスカ州の面積は日本全土の4倍もありながら当時の全人口は30数万人位で、その半数の約16万人がアンカレッジに住んでいました。

二年間の駐在員生活を終えて1976年7月に日本に帰国すると機長になる筆記試験が半年後にあると言われました。脳天気のアラスカで遊び呆けていた私は慌てて準備にかかりました。1977年の3月に筆記試験が有り当時の東亜国内航空や全日空のパイロット達と一緒に受験しました。筆記試験に合格した約1年後の1978年の2月にB747型機の副操縦士からDC8型機で機長になるために機種移行し、航空局乗員課の機長としての技能実機審査を受け合格しました。技術のみ機長のライセンスを取得しました。その後左側の機長席で指導教官のもと定期便で離着陸ができるようになりましたが、まだ機長ではありません。機内アナウンスも家で練習しました。この頃には多くのB747型機、DC10型機が国内線にも就航しており、DC8型機の国内線での離着陸枠が少ないため、機長席での離着陸は東南アジア路線に限られてしまいま



アラスカでの楽しみは鮭釣り

した。

シンガポール、ジャカルタ、クアラルンプール、バンコック、マニラや昔の香港空港、ソウルと釜山で離着陸の経験を積みました。悲しいことに私が機長訓練を始める前の年に悪天候のクアラルンプールでDC8型機が墜落する事故がありました。何故かDC8型機ばかり事故を起こしていました。

ジェット機は科学の粋を集めていますが、機長訓練はシートベルトサインの点灯と消灯のタイミング、航路上や飛行場の天候の判断などとてもアナログ的な世界です。教官機長は皆ベテランで優秀ですが訓練生の私と相性の合いにくい方もおられました。この様なとき、教官機長の判断を理解し、着陸してから何故自分の判断と違うのかを検証しました。独り立ちしてみると、優しい物わかつきのよい教官ばかりではだめだと思います。ときに孤独に耐えなければならない機長は多少理不尽とも思える指導にもついていける頑張りが必要な経験でした。

東南アジアでの離着陸経験を積んでから国内線で本格的な機長昇格の為の最終訓練に入りました。機長“OJT”(On the Job Trainingの頭文字)です。ひと月の間、教官機長と国内線で全てのフライトを全く同じくします。風邪など引くことは

許されません。乗務の時は早めに飛行管理室にゆき、当日の気圧配置をチェックし、目的地や航路上の気象の判断、適切な搭載燃料の決定し、客室乗務員との機内サービスのタイミングなどを確認します。搭乗口に着いたら整備員と飛行機の整備状況と実際の搭載燃料を再度確認します。

ひと月の間、私が全て操縦し、副操縦士の仕事をしていた教官機長は私の操縦技量やフライトマネイジメントが安定しているかどうか判断します。2 か月間に二人の異なる教官機長から私を機長としてもよいとのサインを頂くと、更に所属長の機長により最終確認フライトがありました。その後、航空局運行課の審査官と、社内のチェッカー機長により国内線で飛ぶ路線全ての飛行審査を受け合格しました。数日後に本社で社長から直接機長発令の辞令を頂きました。社長室には既に運航担当役員と乗員部長が待機しておられ、緊張しましたが、私を優しく励ましてくださいました。

機長としての初フライトは、乗務の前日に大阪に移動し翌朝の大阪伊丹空港から成田空港の往復便でした。飛行機は DC8 型スーパー61、飛行機マニアの間では空の貴婦人と言われるスリムな 233 人乗りです。

今まで右の副操縦席には教官が座っていましたが、この日は私より若い副操縦士が座っていました。機長席に座って若干緊張したのですが、このフライトは決してミスをしてはいけないという心理的な圧力があったのだと思います。

エンジンをかける前までは精神的に緊張していましたがエンジンをかけると心にゆとりが出てきました。離陸してから着陸するまでの手順はいつもと同じです。経験豊かな副操縦士は私をよく補佐してくれて余裕を持って機長の初フライトを終えました。往復の乗務を終えてホテルの部屋に入るとその日が何か夢のように思えました。

翌日は沖縄泊まりのフライトでしたが一緒に乗務した客室乗務員、副操縦士、航空機関士たちがホテルで新米機長の初フライトを祝ってくれまし

た。

国際線を飛び始めて間もなくの頃、成田からアンカレッジの便に乗務した時のことです。夕刻出発の旅客便で出発準備は順調に進み、お客様も搭乗を終え、貨物も積み終え DC8 型機のドアも閉まりました。管制塔よりアンカレッジまでの飛行ルートと飛行高度をプラン通りに承認を得て、4 つのエンジンを始動してから搭乗口を定刻に離れました。

離陸のため滑走路に向かっていると、このとき台風の影響により雨は強く降り、風も滑走路に対して横風が限界値近く吹いていました。誘導路は雨で光っており、着陸してきた飛行機は停止するときにブレーキング・アクション・プアー（滑走路が滑りやすくブレーキが良く効かない）と管制塔にレポートしていました。離陸する飛行機は離陸開始後に加速し、限界速度到達する前に鳥との衝突やエンジン火災が発生した場合は離陸を中止します。限界速度以上では滑走路以内で止まりきれないので、残りのエンジンで離陸を続けなければいけません。この様な故障時の訓練は十分に受けていますから通常の離陸では何の問題ありません。

しかし当時は強雨や横風など悪条件での規定は有りませんでした。私は滑走路の端まで走行しながらこの悪天候の中の離陸に不安を感じてきました。管制塔に離陸をやめて搭乗口に戻りたいとリクエストし出発した搭乗口に戻りました。私の後に続いていたパンアメリカン機とアリタリア機、日本航空の DC10 型機はこの雨と風の中を何事も無く離陸して行きました。

私達は搭乗口で 40 分ほど待機し、雨も風も治まって後、再度管制承認を得て離陸しました。お客様にはご不便をおかけしましたが機長になりたての私にはやむを得ない判断だったと思っています。かつて社長は”臆病者と言われる勇気を持って”と話されたことがありました。

ラオス・シヴィライ村の刺繍——を通して

ラオス山の子ども文庫基金 安井清子

以下は、安井清子さんが、ご自身の活動の一環として取り組んでおられる、ラオスの山岳姻族・モン族の村と、その作品に関する紹介のお話です。

◆ラオス・シヴィライ村の刺繍——を通して

シヴィライ村の、大きな木の木陰で刺繍をするモン族の女性達の写真があります。

彼らがこの土地に移り住んできた時、この木はありませんでした。ここは何も

ない、ただの赤土の土手だったのです。土手を切り開き、家を建て木を植え、日々を暮らし……子どもたちは大きくなり、そして、木もこんなに大きくなったのです。

私は、1985年にタイの難民キャンプで知り合いになったモンの人々が、1993年にラオスに帰還し、この土地に住み始めてから、ずっと通い続けています。

タイから帰還してきた彼らの生活は、そう生易しいものではありませんでした、自分で畑を耕す生活…でも、後から入ってきた彼らには十分な農地也没有。食べる米にも事欠く家族もあり、病気になったり、学費が必要になったりしても、現金収入の術がありませんでした。そんな中、女性たちは、自分たちで作り出した刺繍で生活の一部を支えてきたのです。

彼らが作り出す刺繍のクラフトを通して、作る人も、販売を手伝ってくださる人も、買って使う人も…ちょっと温かい幸せな気持ちになればいいなあ…と思って、販売支援を続けて来ました。

村の人たちには、「手抜きしないで、一針一針、一生懸命きれいに作って」ということだけを言っ



シヴィライ村の、大きな木の木陰で刺繍をするモン族の女性達

ています。心を込めて縫い込めた刺繍からは、なにか伝わってくるものがあるように感じるからです。

シヴィライ村には、日本の方々の支援で、中学校が立ち、そして、図書館もできました。赤土だった土手には、たくさんの家ができ、60家族ほどが暮らす村となっています。地域一帯にゴム植林がすすみ、シヴィライ村でもゴムに関わる家族も増えています。生活形態がどんどん変わりゆく中で、ラオス全体では、刺繍や織物などの手仕事が増えつつありますが、その中で、シヴィライ村の女性たち、子どもたちは、刺繍を続けています。それは「刺繍」が、女性や子どもたちの自立





を応援し続けてきたからです。

子供たちの中には、進学して学校の先生や看護師になる子も出てきています。自分でせっせと作った刺繍のクラフトの代金を学費に当てて、勉強を続けようとする子どもたちが大勢います。

刺繍は、夢をかなえるための一つの手段になっているのです。それを、皆様と一緒に応援できたら…と思っています。日本の方々のご利用なしには、シヴィライ村の刺繍は成り立ちません。

今後とも、ぜひぜひ、シヴィライ村の刺繍を応援してください。

どうぞ宜しくお願い致します

今、安井清子はラオス在ですが、約 3 か月ごとに日本に戻ってきます。

これまでは、自宅にいる母が、刺繍のご注文の発送などをやっていましたが、現在、高齢になっているために、お急ぎでなければ、なるべく安井が、日本に帰っている間に、発送作業などをしていと思っています。

パソコン、スマホ、タブレットをお持ちの方は、

メール：

pepmerry@yahoo.co.jp

pajhnub@jcom.home.me.jp

でご連絡ください。または、FAX03-3398-2182 をお願いいたします。

お急ぎの方は、其の旨お書き添えの上、お時間に余裕をもって、ファックスでご注文くださいませ。

または、ネット販売：「ラオス・山のふもとの刺しゅう屋さん」<http://pajhnub.ocnk.net/>をご利用ください。これは知人が、損得抜きで、販売支援をしているものです、値段は、ほぼ変わりません。

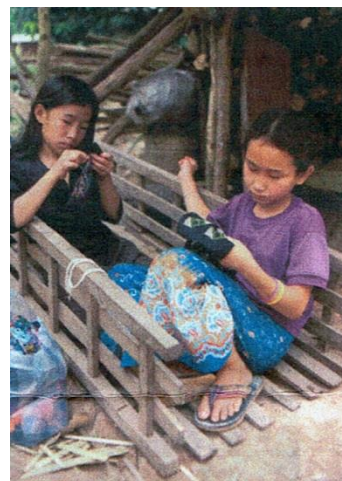
これからも、どうぞ宜しくお願い致します。

2018 年 2 月

~~~~~

以上、安井さんが 2018 年に書かれた、安井さんとシヴィライ村の人々とのかわりについての文章をご紹介します。文中、時間的に不要な部分を割愛させて頂きました。

この品物は、わんりいが対外的なイベントに参加する時、必ず携えて、販売に協力させて頂いておりますので、ご興味のある方は、わんりい事務局にご連絡いただければ、ご購入のお手伝いができるかと思いますので、ご遠慮なくご連絡ください。





# 波乱万丈の生涯 — 李香蘭 (2)

和田 宏

## ■共産主義者か？

香蘭は1950年のアメリカ訪問の際、ユル・ブリンナーとも対面した。彼はスキンヘッドが売りで、モンゴル人の父とルーマニア系ジプシーの母の間に旧樺太で生まれ、北京で育ち、モスクワの劇団で活躍するなど多彩な経歴を持つ男優だが、ブリンナーはギターを奏でながらジプシーの歌を、李香蘭はロシア民謡を互いに歌い、友情を深めた。李香蘭は、日米ハーフの彫刻家イサム・ノグチと1951年結婚し、対米忠誠を拒否したことから共産主義シンパとしてリストアップされ、彼女にはアメリカへの入国査証がおりなかったことがある。嘗て、イスラム教徒の李際春や潘毓桂の世話になった影響もあってか、1980年中東の難民キャンプを訪れ、恵まれない子ども達に寄り添った。

## ■不思議な邂逅

1975年頃、朝鮮人の元従軍慰安婦が、ニューヨークの国連を訪れていた大鷹淑子に特に面会を求めて来て、『貴女が“蘇州夜曲”を歌いながら持っていた桃の花は造花でしたね。』と話した。この女性は、1940年に当時20歳の李香蘭が上海で映画『支那の夜』の撮影を行った時、慰安婦の仕事の休みを貰ってそのロケ現場を、たまたま見に来ていたのである。李香蘭は梅の花がないので造花を持って長谷川一夫の隣で歌った。一人は人気の明星（スター）、もう一人は慰安婦。55歳になった同い年の二人は、何と約35年ぶりに“再会”したのである。この出来事がきっかけになったのか、山口淑子は、後年アジア女性基金の設立発起人の一人と

なり、従軍慰安婦問題に取り組んだ。

淑子は1974年7月に参議院議員に当選するが、自分の娘が将来政治家になって欲しいと願っていたのは、亡き父・文雄の希望だった。1975年7月、参議院議員だった淑子が自民党訪朝団の一員として北朝鮮を訪れた時、面会した金日成から、『抗日ゲリラとして立てこもっていた吉林省のアジトであなたの映画を見たよ』と言われた。脱線するが、私は北朝鮮へ帰国する在日朝鮮人を運んだ北朝鮮の貨客船『万景峰（マンギョンボン）』号が新潟港に入港している折、船を表敬訪問したことがある。船員は全員が胸に金日成のバッジを着け、操舵室や船内食堂など至る所に偉大なる首領さま金日成の肖像画が飾られていた。私は、肖像画の下を通る時、にこやかに一礼した。もし肖像画に向かって批判がましいことを言ったりしたら、下船出来ず、そのまま北朝鮮に連れて行かれると警告されていたので・・・。

## ■迎春花～ご飯食べたか～

李香蘭の『迎春花』という三角関係を扱ったたわいもない1942年の満映映画がある。

迎春花とは、黄梅（おうばい）の漢名であり、英名ではウィンタージャスミン、学名はジャスミニウムヌーディフロラムと言われる。万花に先駆けて咲く、文字通り春を迎える縁起の良い花である。

李香蘭が氷上を軽やかに滑ってアイスホッケーをしているシーンから映画は始まる。奉天（瀋陽）とハルビン（哈尔滨）が舞台である。奉天の街なかで中国人同士



ハルビン市中央大街（旧キタイスカヤ通り）  
（百度百科より）



旧松浦洋行ビル。現在は中央大街観光客サービスセンター（中央大街游客服务中心）  
（百度百科より）

がすれ違った際、『你吃了饭了吗？（あなた、ご飯食べましたか？）』と声を掛け、相手が『吃了。（食べた。）』と答える場面がある。日本から来た男性重役が、『何でもこんな変な挨拶をするのか？』と中国人秘書に扮する李香蘭に尋ねると、『中国ではこれが当たり前なのです』と答える。実は戦前、北京に住んだ私の母が僅かに覚えて帰って来た中国語が、これだった。母の言っていたことが真実であったことに私は感動した。しかも映画の中では続けて、『お前の給料はいくらだ？』とたずねるのだが、これも私が1975年に始めて訪中した時、中国人から訊かれたことがあり、驚いたのである。私は李香蘭が初リサイタルを開いた瀋陽市の旧奉天ヤマトホテル（現在の遼寧賓館）に泊まったこともある。映画『迎春花』のラストシーンは、ハルビンの氷祭りが出て来て、大勢の亡命白系ロシア人がハルビンのメインストリート・中央大街（キタイスカヤ通り）を歩く姿が見られる。私（当時42歳）も1988年に日本へ、黒竜江省電視台の協力を得て衛星中継したTVニュースレポートをしながら歩いた大通りである。

1988年7月25日ハルビン市中央大街（旧キタイスカヤ通り）で。旧松浦洋行ビルのベランダに立ったこともある。

### ■李香蘭よ永遠なれ

中国人・李香蘭として13歳で歌手、18歳で映画デビューし大活躍。本人は日本人だと告白しようとしたが、それも『お国の為だから』と父親等から説得され続けた。中国人記者からも侵略して来た日本軍人に恋をする様な役を演じて恥かしくないのかと詰問された。終戦後は、日本人・山口淑子として生まれ変わり、TVキャスターや国会議員など様々な活動をし、94歳で亡く



母・和田武子（当時23）が歌手デビューした朝日新聞の記事。BKはNHKのコールサインJOBKから。大阪放送局おかかえの歌手と言う意味。（母は、いどこである父・和田勇と結婚したので結婚前後も姓名は変わらず。）

なった。私事で恐縮だが、セミ・クラシック歌手だった私の母は、李香蘭が1939年から1940年にかけて公開された大陸三部作“白蘭の歌”“支那の夜”“熱砂の誓ひ”の映画にヒロインとして活躍していた同じ時期に、北京で新婚ほやほやの生活を送っている。

李香蘭ほど、数奇で波乱万丈の人生を送った人がいたのだろうか？彼女ほど、日中両国の狭間にあって時の軍部や政治に利用されながらも、持てる才能を存分に発揮し、幸運も重なって誰からも好かれた人がいたのだろうか？李香蘭は、有為転変の自身の人生をどんな風に考えていたのだろうかと思うと、想像は尽きることが無い。李香蘭の歌う『東京夜曲セレナーデ』が1949年から翌年にかけてヒットした。歌詞の中に、“二人一つの想いで匂い薔薇よ小田急よ”という個所がある。この歌のお陰で小田急のロマンスカーが一躍有名になり、関連の小説も映画も作られた。小田急線利用者の私としては、李香蘭に感謝している。李香蘭よ永遠なれ！李香蘭永垂不朽！

### ■7つの名前と7つの言語

●李香蘭は、7つの名前があった。

- ①『山口淑子』は、佐賀県出身の父・山口文雄と福岡県出身の母・（旧姓：石橋）アイの長女として生まれた。本名である。
- ②『李香蘭』は、父が親しく付き合っていた山東省の軍閥で、当時は瀋陽銀行総裁だった李際春の乾姑娘（名目上の娘）として李を貰い、香蘭は父の俳号。李際春は回族でイスラム教徒である。
- ③『潘淑華』は、潘毓桂の乾姑娘としての名前。1934年、14歳で北京のミッションスクール翊教女学校に通う際に使用した。
- ④『シャーリー・ヤマグチ Shirley Yamaguchi』。アメリカに行った際に使用した。
- ⑤『ノグチ・淑子』は、初めて結婚した男性がイサム・ノグチ。淑子は31歳。イサムは47歳。結婚期間は1951年から1955年の5年間。
- ⑥『ジャミーラ・ヤマグチ』・・・中東に行った時。ジャミーラは美しい人という意味。
- ⑦『大鷹淑子』・・・1958年外交官・大鷹弘と再婚。淑子は38歳。大鷹は30歳。

●李香蘭は7つの言語を話せる。

- ①日本語、②中国語、③満州語、④英語、⑤朝鮮語、⑥ロシア語、⑦フランス語。



## 〈2020‘わんりい’新年会・シュワンヤンロウで新年を祝おう〉

2019年2月2日（日） 場所：麻生市民館・料理室



わんりいの最大のイベントである「わんりい・2020 年新年会」が、2月2日に盛大に開催されました。今年は春節が1月25日であったので一週間後の日曜日となりました。当日は快

晴でこの時期としては暖かな日和でした。11時から始まるので10時半過ぎから続々と参加者が集まり、あちこちでお互いの久闊を叙する挨拶が聞かれました。今回の参加者は約40名。

定刻通り有為楠さんの司会でスタートしました。まず殷さんのご発声でみな高らかに「乾杯」。寺西代表の挨拶、そして初参加者の紹介が行われました。また遠くは長野からこの日に合わせて参加された岩田さんの紹介もありました。一通り終わると待ちに待ったシュワンヤンロウ（涮羊肉）タイムです。シュワンヤンロウは羊肉のしゃぶしゃぶ料理で、わんりい新年会の定番料理です。用意された羊肉や野菜を煮立ったシイタケなどでだしを取った鍋に投げ込みます。そして別に腐乳で作ったタレにお好みで刻んだネギや香菜（パクチ）を入れて食べ始めます。筆者は香菜が苦手ですが、美味しいと言って食べる方が殆どで日中の文化や習慣の融合を感じます（笑）。

1時間15分くらいの歓談の時間が過ぎ、12時半頃から余興タ

イムとなりました。今年は例年になく出し物が豊富で会場は大いに盛り上がりました。順を追ってご紹介しますと――

### ①福島裕子さん

新年会初のフルート演奏。美しい音色で次の2曲を演奏され会場を魅了しました。

★「想いの届く日」：アルゼンチン出身のカロス・ガルデル作曲のタンゴの楽曲

★「アマポーラ」：スペイン出身のホセ・ラカジェ作曲のラブソング。アマポーラとは、ひなげしの花のこと。

### ②河野公雄さん

新年会は二度目の登場で、前回と同じ奇術を鮮やかな手つきでいくつか披露されました。聞いたことの無い呪文を唱えながらの奇術でしたが、ただただ感心するばかりでした。種明かしはありませんでした。

### ③佐藤紀子（張怡申）さん、菅野良子さん、庄琳那さん。

すっかり新年会のおなじみになった三人での二胡の合奏。心に染み入るような音色で次の2曲を演奏されました。★中国民謡三首：安波の作曲。峡北民謡「打黄羊調」を基調にして作った「拥軍花鼓」という民謡で、お正月を祝う曲だそうです。





## ★もののけ姫の主題曲

### ④和田宏さん、木村博美さん

芸達者な和田さんの美声と木村さんのバイオリンの伴奏。次の2曲を独唱されました。

★「夢路より」(美麗的夢神)：フォスター作曲。1番は英語、2番は中国語で歌われました。

★「迎春花」：和田さんが大好きな李香蘭が歌った歌で、映画にもなりました。1番は日本語、2番は中国語で歌われました。

会場の〈アンコール〉の声に応じて「大海航行靠舵手」を熱唱。やんやの喝采でした。

### ⑤木村博美さん

バイオリン演奏。ベネチア出身のビバルディ作曲の「カンタービレ」をじっくりと聞かせて頂きました。

余興が終わり、ビンゴタイムに移りました。今年は、木ノ内さんと鈴木さんが担当で、あの何でも揃う店、ドン・キホーテで購入したビンゴの道具を使って始まりました。中には「リーチ」ばかり5通りできてビンゴが完成しないという珍しいケースもありましたが皆さん大いに楽しまれたと思います。

続いて恒例のPRタイムに入りました。それぞれのPRが行われた最後に、司会者から殷さんが昨年開店された中華料理店(百味苑)を紹介すると、殷さんからわんりいへの感謝の気持ちを熱く語られると共に、京劇の演目の一節を歌われその思いを伝えていただきました。



最後の手締めは、今年は川崎支部長の山田賀世さんがご挨拶頂いた後、三三七拍子で綺麗に締めていただきました。(報告：寺西)



## ◆‘わんりい’のお知らせ◆

### —わんりい会報のワード編集者を募集します

‘わんりい’は、日中文化交流市民サークルが誕生した1992年（平成4年）から、2月と8月を除く年10回の作成配布を始めて28年目に入ります。発行した会報は、2020年の新年号で丁度250号を数えます。この長年の発行の歴史を更に繋げていきたいと頑張っておりますが、会員の高齢化が進み、編集作業に当たる会員が減少し、毎月の発行に黄信号が灯るようになってまいりました。

そこで、この際思い切って、‘わんりい’を読んでいただいている皆様に、‘わんりい’の編集を手伝って頂ける方を募ろうと考えました。ある程度のパソコン技術と中国文化に対する関心をお持ちの方にお手伝いをお願いしたいと考えております、

休刊月（2月・8月）の前月（1月・7月）を除く毎月数回、パソコン上で誌面の作成作業をお願いしたいのです。

このお願いに興味を持っていただいた方は、‘わんりい’の寺西代表までご連絡を頂けると、更に詳しいお話をさせていただきます、ご連絡をお待ちします。

連絡先：寺西俊英 ☎090-1425-0472

Mail address : t\_taizan@yahoo.co.jp

### 【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿で作られています。海外旅行などで体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話、これだと思う楽しいイベント情報などを気軽に寄せ下さい。表紙写真も募集中です。

#### ▼3月の定例会

3月10日（火）13：30～

三輪センター第三会議室

#### ▼3月号発送は2月29日（土）10：30～

三輪センター第二・第三会議室（弁当持参）

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します  
年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい

9月以降は、当年会費1100円になります。

下記へお問い合わせください。

■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。「文化は万里につながる」の想いから名付けました。

主としてアジア各国から来日の方々と協力して文化交流活動が続け、国や民族を超えた友好を深めて来ています。会員になりますと、

①年10回、会報誌‘わんりい’を送付

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

◆わんりいのホームページは、都合により暫くお休み致します。ネットでお楽しみ頂いていた方には申し訳ありません。ご入会いただければ、本誌を郵送させていただきます。

◆町田国際交流センター（町田市民フォーラム4F）、町田生涯学習センター（109ビル6F）、中国文化センター、川崎市国際交流センター、神奈川県立地球市民かながわプラザ・他でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

### ‘わんりい’251号の主な目次

|                                                    |    |
|----------------------------------------------------|----|
| 寺子屋・四字成語(30)宠辱不惊……………                              | 2  |
| 「遼陽」という街（6-最終回）……………                               | 3  |
| 「漢詩の会」(37) 李商隱の『夜雨北に寄す』と<br>杜甫の『江南にて李龜(年に逢う)』…………… | 6  |
| 海外出張の思い出（ナイジェリア編⑨）……………                            | 8  |
| 中国山西省の旅（後）……………                                    | 10 |
| 退職ジャンボ機長の回想③……………                                  | 12 |
| ラオス・シヴィライ村の刺繍—を通して……………                            | 14 |
| 波乱万丈の生涯 / 李香蘭（2）……………                              | 16 |
| 2020 ‘わんりい’ 新年会報告……………                             | 18 |
| ‘わんりい’入会案内・編集者募集……………                              | 20 |